

2018年度 上海教育研修 —自分の目で海外をみるということ—

三上 駿

(授業力高度化コース 11 期生)

1. はじめに

現在日本ではグローバル化が進み、多くの人材が世界で活躍している。また、そのニーズにこたえるために教育においてもグローバルな社会に対応できるための教育が行われている。その中で生徒が海外に訪れるという機会も増えてきている。しかし、どのような目的を持って海外に行くか意識させることは難しい。私自身教師を志す人間として、自分の目で海外を見るということにどのような意義があるのか、そしてそこから得られた経験や知見をどう活かしていくのかということについて考えたい。

2. 上海研修の概要

中国教育研修は本年度で9回目を迎える。本研修は上海師範大学と京都教育大学の間に締結された学術交流協定を基に行われているものである。研修期間は約1週間あり、研修の活動として中日院生間での交流・自由研修・学校見学・実地指導研修を行った。

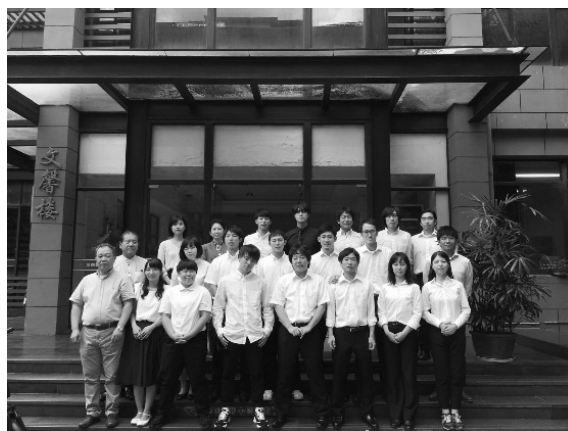
3. 研修の内容

研修の具体的内容を「中日院生との交流」「実地指導体験」「自由研修」にわけて紹介する。

3.1 中日院生との交流

上海師範大学の院生との交流を2日間行った。主な内容としては文化交流研修と上海師範大学教育学院の先生による講義である。

文化交流研修では、上海師範大学の院生と古都蘇州を見学した。蘇州は江蘇州にある都市で、私たちは古い街並みを今に伝える旧市街や庭園などを散策した。中国の院生の方々は大変優しく、道中常に我々に気を使ってくださり、気さくに話しかけていただいた。その中で両国の文化の違いや好きな部分、尊敬していることなどについて話した。この際、中国の院生の方々が心から日本を愛し、その魅力を伝えてくれたことがとても嬉しかった。また、この間私たちは英語を



介して会話していたのであるが、英語での意思の疎通が行えることに安心感を覚えた。そのように感じたのは、上海市内では英語がほとんど通じないからである。ある程度の高等教育を受けている人間は英語教育を受けているので話すことができるのかと実感した出来事であった。

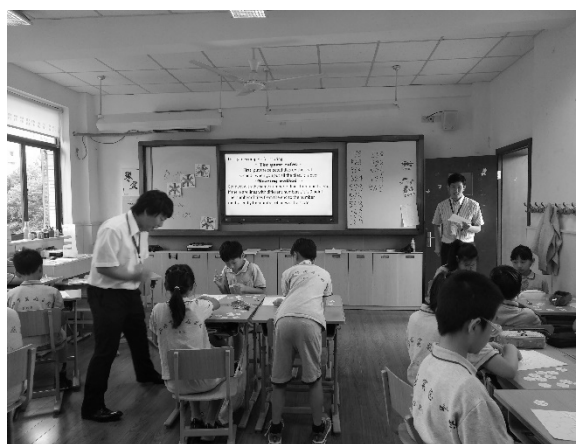
教育学院による講義では、中国の初等中等教育制度や現状について説明された。その中でもとても印象に残っていることがある。それは学力格差についてである。上海は中国でも有数の経済都市であるため、多くの労働者が職を求め地方から出稼ぎに来る。彼らは国籍を持たないため、当然彼らの子供たちにも国籍はない。そのような子供たちに対して教育を施す公立学校は存在するが、中流階級以上の子供たちと学力を比較すると、その差は歴然である。

上海はPISA調査でも上位に位置しており、都市全体で学力の保障がなされていると思っていたので、都市部での学力格差問題は日本同様に存在していることを実感した。

3.2 実地指導体験

本研修の目玉ともいえる実地指導研修では、上海市実験学校国際部小学部と上海市田林第二中学校において、学校見学と指導体験を行った。

特に上海市実験学校国際部小学部は特徴的なものであった。全生徒が中国以外の国籍を有し、かつ日常会話レベルの英語を話すことができるのである。そのため、授業カリキュラムも独特で、欧米人の教師による英語で行う授業（理数系）や、社



会科に関しては日本のように歴史や地理の学習は行わず、経済のみを学習するようになっている。これは彼らが将来、グローバル社会で活躍することを見越しているからである。そのため、他の公立学校で行われている共産主義や中国共産党に関する授業も存在しない。グローバルな視点には政治的イデオロギーは必要ないのである。

そのような生徒たちに対して授業を行うことは大変なプレッシャーであったが、授業を行ってみた率直な感想は「どこの生徒も同じである」ということである。実験学校での授業は二人1組で行い、私たちのペアは「take it easy」という柵形のタイルを縦横斜めに並べてスコアを競うボードゲームを行った。生徒たちは想像以上に興味を示し、より多くスコアを稼げるように一生懸命頑張っていた。一つひとつのアクションや結果に対して一喜一憂し、よりうまくなるためにはどうすればよいか試行錯誤している姿は私が日本の教育現場で見てきた景色であり、またかつての自分たちと同じだった。しかし、勝ちたいという気持ちが先行するあまり、ルールを破り、ハイスコアを出そうとしている生徒もいくらか見受けられ、中国人のハングリ一さが垣間見えた。

このように根本的な部分は日本とも変わらない部分があったが、やはり内容の把握や飲み込みは明らかに違っていた。教師の話を聞いてただその作業をするのではなく、違った視点や角

度から考えてみるといった創造性や応用力といった部分は群を抜いていた。

これらは様々な国や地域に訪れたことのある生徒の経験やそこから得られた知見，そしてインターナショナルスクールならではのワールドワイドな教育が作用しているのだと感じた。



3.3 自由研修

自由研修は，事前に上海で学びたいテーマを各自が設定し，それを行う時間である。私は中国における道德・情操教育の実践について日本と比較したいと考えていた。

上海市実験学校国際部小学部は道德教育の時間を「美德」とし、従来の中国における道德教育とは異なり、特定の政治、思想教育は行わず、様々な国や地域の文化や考え方について学ぶものとなっている。これは、国際理解教育の一環とされ、ソーシャルスキルの習得にも務めている。

田林第二中学校はインターナショナルスクールではなく、一般の公立学校であり、生徒の出自は様々で、貧富の差も存

在するが、道德，そしてそれら全体を包括する学校の取り組みによって，規律正しい生徒を育んでいる。

それは，道德において思想教育を主眼としてとらえる従来の方法ではなく，生徒一人ひとりがお互いを思いやる心をはぐくむことを大切にしているからである。植え付ける、刷り込むのではなく、考えさせることを重要視している。この点は，それぞれの違いや良さを認め，本音で意見を交流しあう日本の道德にも通ずる部分があった。

町の本屋に立ち寄ってみると，家庭教育によって道德心を養わせるための書籍が数多く存在した。その種類は，日本の道德の教科書のような読み物やルールやマナーを漫画にしてまとめたもの，年齢や発育段階に応じたしつけの本など多数のものが揃っていた。

また，市内には多くの進学塾が乱立していたが，その中に「親のための塾」が存在した。親のための塾とはその名の通り，保護者を育てるための塾である。具体的にどのようなことを教えているのか疑問に感じたので，上海師範大学の院生に聞いたところ，中国では近年受験競争が激化しており，親は子の学習環境を確保するために，身の回りの世話をほとんど行っている，いわば上げ膳据え膳の状態なのだそう。それによって，本来家庭で行われてきたしつけがおろそかになり，道德心を養う以前に身の回りのことが自分でできない子どもが増えたことが親のための子育て塾ができるきっかけとなった。

今回私は中国，特に上海における道德・情操教育の実践について調べたわけであるが，これらの教育の根底にある部分は，ルールや規律，マナー，そして相手をいつくしむ思いやりの心を養うにはまず家庭で親が子供に教え説くことが始まりであると感じる。それは家庭における積み重ねや経験が子供の骨格に肉付けされていくのであり，家庭で身に着けた慣習は簡単に変

えることはできないからである。故に、家庭と学校との連携はより一層密なものにしていかなければならないと改めて感じた。

4. 最後に

私は今回の研修において多くのことを実際に自分の目で見て体験することができた。上海研修をあらためて振り返った際、このように見聞を広めることができたという喜びと共に、知らないということがいかに「もったいないか」ということを実感した。私たちは中国という国に対してそれなりの知識を有しているだろう。しかし、それらの多くはメディアや教科書などに映っているもの・書かれているものを見たことに過ぎない。つまり、



これらが映していない事実や側面は見逃してしまっている。そして、その見えない部分を見える部分の情報のみで補填し、決めつけているのではないだろうか。

実際に上海に研修に訪れてみて、様々な点において日本とは異なる部分が多かったが、一方でかつての日本を投影した部分が多くみられた。上海から見た中国はまさに日本の高度経済成長期～バブル期のように高層ビルが次々と建てられ、インフラ整備がされ、教育環境も向上している。さらに京都のように古くからの歴史的遺産も多く残されている。これらはやはり自分で足を運ばなければわからないことだった。

現在、日本の教育ではグローバル教育・国際理解教育などが推進されている。しかし、歴史学習や異文化理解、言語の習得にフォーカスされがちであるが、これらの学びを通して地球社会づくり・人権・平和・紛争防止などのテーマを通して世界規模でものごとを考える発想を養っていくことが帰結点として重要であると考えます。

私自身教師として教壇に立った際、海外のことを知ることを通して、様々な視点や考えを身につけさせ、あらためて日本や自分の住んでいる地域に対するアイデンティティを養っていきたい。

今後、教育に携わる仕事に就くであろう大学院生の方々には是非、上海教育研修に行ってもらいたい。そして、多くのことを実際に自分の五感で感じてもらいたい。そして、各々が感じたことや得られた様々な知識や視点を基に、実際に海外に行くということが自分にとってどのような意味を持つのかあらためて考えてほしい。